

自動車運転機会の減少または運転休止が技能低下に及ぼす影響 —ペーパードライバーと教習生との比較—

田中 美咲

若年層の車離れが進行し、ペーパードライバーの数は増加しているが、若年層ドライバーの交通事故件数は依然として多い。運転再開を望むペーパードライバーは多いものの、運転に対する不安や恐怖から運転を避け、自身の運転技能を不安視している。よって、ペーパードライバーはどのような能力が低下しているのかを調査することが必要であるが、ペーパードライバーを対象とした研究はほとんど行われていない。本研究は、ペーパードライバーと教習生を対象に運転技能を測定する実験を実施し、両者の成績を比較することで運転機会減少または運転休止の影響を検討した。

本研究においては「普通自動車運転免許取得から1年以上経過しており、自動車の運転頻度が月に1度以下である者」をペーパードライバーと設定し、実験Ⅰ、Ⅱともにペーパードライバー群20名、教習生群20名の計40名を対象に実験を行った。

実験Ⅰではハザード知覚能力測定実験と交通法規に関するテストを実施した。前者ではハザード知覚教育用ソフトウェアのHazard Touchに実際の事故映像を組み込んでiPad上に表示した。事故発生前の動画で道路状況を把握した後、静止面に切り替わったところで危険箇所・危険対象物(すなわち、ハザード)をタッチするように指示し、画面への総タッチ数、ハザード検出数、ハザード検出までの所要時間を測定した。後者では交通標識・標示や運転時の注意事項等、学科試験の問題を参考に作成した10題を出題した。その結果、事故に直結するような重要度の高いハザードの検出率には有意差がなかったが、その他の重要度の低いハザードの検出率はペーパードライバー群の方が高かった。また、交通法規に関しては、重要度の低い内容から忘れてしまう可能性が高いことが明らかになった。本実験のペーパードライバー群は「月に1度」または「2~3か月に1度」運転をしている人が半数以上であり、年に複数回ほどの運転頻度・経験がある場合にはハザード知覚能力が免許取得直前と同程度に保たれ、ハザードの種類によっては高くなる可能性があるが、車両操作が伴うと不十分になると推測された。

実験Ⅱでは、実験Ⅰのペーパードライバーよりも運転頻度が低い人を選定して教習所場内や周辺の公道における実走行実験を実施した。車両操作技能や安全確認、合図のタイミング等の安全性に関わる技能などを検定員が5段階で評価し、両群の評価を比較した。その結果、右左折の曲がり方や後退時の操作といった複雑なハンドル・ブレーキ操作が要求される項目は技能低下の度合いが大きく、一時停止交差点の通行といった単純な車両操作や交通法規の知識のみで対応できる内容は、教習所指導員から見て比較的高い評価であった。加えて、車線変更/進路変更時の合図のタイミングや後退時の車両操作等は元々習得できていない可能性があり、教習のみでは習得されず免許取得後の運転経験が重要であると推察される。また、ペーパードライバー群のみを対象に、自身の運転技能や運転への意識に関するアンケート調査を実施した結果、ペーパードライバーは安全性よりも認知・操作技能に不安を感じていることが明らかになった。また本実験に参加したペーパードライバーの多くが教習時にS字・クランク走行や縦列駐車・方向変換等のハンドル・ブレーキ操作に最も苦戦したと回答しており、このような教習時の苦手意識が車両操作への不安に繋がっている可能性がある。安全性に関しては、走行実験において速度超過等の不安全行動が見られ、自己評価通り安全性の高い運転ができていたとは言えない場面もあった。ドライバー自身の認識と実際の行動にギャップがあるため、安全運転の実現にはペーパードライバー講習を通して車両操作技能を向上させるだけでなく、安全意識も向上させる必要がある。(安全行動学)